

とこしえの山々は砕かれ、

永遠の丘は沈む。

しかし、主の道は永遠に変わらない。（旧約聖書・ハバクク書3の6より）

The ancient mountains crumbled and the age-old hills collapsed.

His ways are eternal.

この世の一切は、壊れていく。いかに世間に知られ、世界に有名なものであっても、必ず壊れ、忘却の海のなかに沈んでいく。何かの教義、コンクール等々で優勝したということ、〇〇が世界的な大国の指導者、大統領になった、というようなことも、一時的には世界をかけめぐるニュースになる。しかし、それらすべては、時の大きなうねりの中に呑み込まれていく。

そのような万物流転のなかで、主の道だけは永遠に変わらない。そのことを、いまから2600年ほども昔にすでに啓示されていたのである。預言者ハバククといっても、大多数の日本人には知られていないであろう。旧約聖書においてもわずかに3章の短い文書である。しかし、ここには、のちの新約聖書でとくに重要となった真理、「義人は信仰によって生きる」ということが記され、このことを使徒パウロは、その代表的な書簡ローマの信徒への手紙の最初の部分（1章17）や、ガラテヤ書3の11などに引用している。

どんなに私たちの世界が変容しようとも、また私たち自身も老齢化や病気、事故その他で弱くなっていき不自由になっていこうとも、決して変わらない真実なものがあり、私たちを見守り、かつ導いてくださるといふこと—そのことは驚くべきことであり、大いなる福音である。

キリストも、次のように言われた。

…天地は滅びるが、わたしの言葉は決して滅びない。（マタイ福音書24の55）

キリストの言葉、それは神の言葉そのものである。神の言葉は神のお心、ご意志そのものから出ている。それゆえに、このことは、神が永遠であり、いかなるこの世の目に見える世界の変動や流転、あるいは破壊、消滅などにも関わらず、その愛と真実なる存在は続くということである。

私たちの地上の命は—そして地球や太陽の寿命さえ有限であるなか、真の永遠のものを知らされている、そしてそのことは、科学技術や人間の思索、さまざまの学問などによっても得ることはできない。

ただ、信じることによって聖なる霊が与えられ、その永遠の存在は、少しずつ私たちに、またときには突然にその深い真理が示さることもある。

「求めよ、そうすれば与えられる」というキリストの言葉にしたがって、私たちもともに、この永遠の存在たる神とキリストの言葉を求め、新たな力を日々与えられていきたいと思う。

徳島の風景から 吉野川 (徳島県)



半世紀ちかくにわたり、ずっと私の心を惹きつけてやまないのがこの吉野川です。この川は四国山地から流れ出て、県西部の池田町付近からは、この写真のように途中でゆるやかな蛇行が見られるところもありますが、全体として東へ東へと80kmほども流れています。この写真は、河口から10数kmさかのぼったところで、西方に向っての撮影です。

川幅も広く、最長川幅は、日本では二番目に長い約2.4km、しかも河口に近づくにつれて、水は川幅いっぱい豊かに流れています。長さは200kmちかくあります。

この吉野川を見るたびに、人間の作った公園などがいかに比較にならないものであるかを知らされます。このような周囲に何ら大きなビルも観光に関する建造物もなく、ただ黙して流れ続けている有り様は、静かに見つめているとき、いろいろなことを語りかけてきます。広大な流域をうるおす水そのものの深い意味、その力、緑、大空と川の青、そして遠くの山なみ—それら一つ一つは、命にかかわっていると感じます。深い青色は、深く澄んだ創造者の御心の一端を思わせ、緑はゆたかな命と希望、そして流れてやまない川と対照的に動くことのない山々の連なり。

山—それは旧約聖書に、「私は山に向って目をあげる。わが助けはどこから来るか。天地を創造された神から来る」(詩篇121)と言われているように、全能の神による不動の力、救いのたしかさを知らされます。

この雄大な川の流れ—その水はいうまでもなく、すべての生命を支えているものです。そして聖書には、さらに人間の根源を支える「いのちの水」のことについて記しています。この世界にも霊的に見るときには、聖なる水がはるか数千年昔から流れ続けているのを思います。「私を信じる者は、その人の内から命の水が川となって流れ出るようになる。」(ヨハネ福音書7の38)

(文、写真ともT. YOSHIMURA)